

3種類のコーパスを用いた3級4級文法項目の使用頻度調査とその考察

江 田 すみれ
小 西 円
(早稲田大学大学院)

1 目的

近年、コミュニケーション重視の教育が提唱されるに従い、初級の文法項目見直しの議論が起こっている。水谷（1992）は、現行の教科書は使用実態に基づいていないという問題点を指摘している。小林（2002）は「これまで暗黙の前提とされてきた「いわゆる初級文型」といった枠組みを一旦すべて取り崩し、（中略）文法シラバスの再構築をはかる必要がある」（p160）と述べている。野田（2005）は「新たに教えるべき事項を増やしていくだけでは学習者の負担がどんどん増えていってしまう」ため、「この表現はこのレベルでは話せなくてよい」というように unnecessary 項目を削っていくことも重要である」（p19）と述べた。

本稿は、こうした議論に対して一定の基礎となる資料を提供するため、文法項目の使用実態を調査した報告である。話し言葉・書き言葉の複数のコーパスを用いて『日本語能力試験』3級4級の文法項目の使用頻度を調査し、基本的とされる文法項目が実際の言語生活でどの程度使われているかを調べてみた。

この調査によって示そうとしていることは以下の3点である。第一に、現実の言語生活に比較的近い文脈での3級4級の文法項目の使用実態を知ること。第二に、文法項目の基本性とはどのようなことであるか考えること。そして第三に、複数のコーパスを用いて調査していることから、話し言葉での文法項目、書き言葉での文法項目など、学習者の多様化に対応できる文法教育を考えることである。

以下、2、3節で本調査の意義・位置づけを述べ、4、5節で調査の方法を述べる。6節で調査結果を示し、7、8節で調査結果とその考察を行う。最後に9節で全体をまとめる。

2 シラバスデザインと本調査の位置づけ

日本語を学ぶ学習者の多様化、学習目的の多様化は近年の大きな流れであり、日本語教育はそれに対応し、学習者のニーズに合った教育を考えていかなければならない。

2007年の日本語教育学会では『日本語能力試験』のシラバス改訂が発表された。新しい日本語能力試験では課題遂行能力、コミュニケーション能力を試す問題が導入されるそうである¹⁾。

このように学習観、教育観が変化している中で、従来の文型積み上げ式の考え方による文法項目の使用頻度を調査することには次のような意義があると考ええる。

第一に、課題遂行能力、コミュニケーション能力を伸ばすことは文法力の否定を意味していない。小林（2002）が教育文法という表現で述べているように、従来の文型積み上げ式の文法に限らない、コミュニケーション能力育成に対応する文法の研究・教育は重要であり続けるということである。それには、まず、基本的とされる文法項目がどのように基本的なのかをきちんと位置づける必要があるであろう。ひとつの方法として、従来論理性で整理されてきた文法項目を頻度という点からとらえ直した場合、何が見えるか考えてみたい。

第二に、言語の機能ということを具体化することを提案したい。言語の機能を具体的に教室で取り上げることを考えた場合、それらはそれなりの形式をもったものとして抽出されるが、小林（2002）は現在の「機能・概念シラバス」とは、「文法構造シラバス」を前提にした「いわゆる初級文法」といったものが先にあり、それに恣意的なラベルづけを行い、配列を変えたもの」（p159）と述べている。学習者にとって有用な機能・概念シラバスを早急に構成しなければならない。それには、迂遠なようではあるが、従来の文法項目の使われ方をきちんと把握し、概念・機能といった面からこれらの項目を見直すことが役に立つであろう。

以下にこれらについて詳しく述べる。

2-1 文法項目が基本的であるということ

初級の文法項目はこれまで基本的とされてきた。しかし、それはどのような意味で基本的なのであろうか。『日本語能力試験出題基準【改訂版】』（以後『出題基準』と略す）では、8種類の日本語教科書の中で4種類あるいは3種類の教科書に出ているものを採用したと述べている（p140）。ではそれらの日本語教科書はどのようにして文法項目を選んだのであろうか。

佐治（1989）は品詞論、構文論を簡潔にわかりやすく説明しているが、その中に述語の詞的部分・（詞的）助動詞部分・準助動詞部分・（辞的）助動詞部分・終助詞部分と整理された表が載っている²⁾。この表にあげられている形式は大半が初級の教科書に載っている項目である³⁾。つまり、従来基本的とされてきたのは、文の成分、述語、動詞述語文、形容詞述語文、活用、節とその種類などの、文の構成の理解とそれらの構成要素の使用であろう。そして、これらは文を形作るために必要な基本的な知識であるということで初級に設定されている。これらは日本語がどのような文法によってできているかを知るという点では有用で基本的な知識である。しかし、コミュニケーションという面から見るとどうなのであろうか。量と内容の点で疑問が3点ある。

第一に、必要性の問題がある。これらの知識はすべてコミュニケーションで同じように必要なのであろうか。

第二に、学習時期の問題がある。これらは初級段階で大半を学ばなければいけないものであろうか。中級で学んでもいい項目があるのではないだろうか。

第三に、コミュニケーション上の問題がある。規則の上で基本的であるものを、われわれは日常生活で実際に使っているか、という問題がある。これらの表現を実際に使った場合、コミュニケーションの上で問題を起こす可能性はないであろうか。あるいは外国人的な表現になっていないだろうか。フォード（2005）が「ないでください」を取り上げて述べているように（pp107-

108)、いわゆる基本的な形は実際の言語生活では直接的過ぎてきつい場合があるのではないか。

第四に、難易度の問題がある。初級項目である3級4級項目は、「やさしい」「習得しやすい」項目であろうか。必ずしもすべてがそうとはいえない。「ている」の習得状況についての許(2000)の研究が述べているように、初級項目でも、用法によっては中級上級になっても習得されないものもある。そうした項目は初級で出すだけでいいのだろうか。中上級で再度整理する必要があるだろう。

2-2 言語の機能と本調査について

言語の機能を必要かつ十分に学んでいくということはどのようなプロセスになるのであろう。

西口(1995)には機能と言語の項目が資料として上げられている⁴⁾。鈴木・筒井(2001・2002)は『日本語機能文型試用版(1)(2)』として日本語の文型を機能の観点からまとめている。ヨーロッパ日本語教師会による『ヨーロッパにおける日本語教育とCommon European Framework of Reference for Language』(2005)には共通参照レベルの全体的な尺度、言語使用の外的コンテキスト、共通参照レベルの自己評価表が上げられており、言語使用の外的コンテキストでは「場所・機構・関係者・関係する事物・イベント・行為・テキスト」がかなり具体的に述べられている。しかし、言語の機能の一覧は載っていない。

しかし、これらのほかにも一定の機能を持つ表現はたくさんあるであろう。また、一つの形式が文脈によって違う機能を果たすことも考えられる。鈴木(2003)は勧誘をとりあげ、勧誘の談話とはその中に勧誘の内容に関する相談や実行の手続きに関する相談などを含むものであり、それらがまとまってひとつの勧誘という談話が成立すると述べている。また、同時に、明示的な勧誘の発話も承諾の表現もあらわれない勧誘の談話もあると述べている。

では、これらの機能はどのように段階付けて学ぶと効果があがるのだろうか。『日本語能力試験』の新試験では級が5段階になるそうだが、その段階わけに機能をあてはめるのはどのような基準によるのであろうか。その基準の正当性はどのようにして測るのであろうか。

本研究は、現在は文法項目つまり形の調査をしているが、頻度調査である程度の結果が出たあとは、各項目の用法について研究することを次の段階として考えている。その際、各項目の用法の中に、意味というより機能として分類したほうが適当なものが多数含まれていることはすでに一部発表している。たとえば鈴木(2006)は学習者に必要な言語行動から文法項目を見直そうという提案をしている。江田(2005)は「ば」「と」について「定型」という一分類を設定した。しかし、これらは「～ばいい」「～といい」などの形で「すすめ」「提案」などの機能を果たすものである。本研究を進めていけば、機能に関する項目についても頻度の面で一定の資料が提供できる可能性がある。

3 頻度と学習・習得について

文法項目の提出順と頻度の関係について本稿の立場を述べておこう。

文法項目の提出順については、考えるべきことがいくつかある。

(1) 基本的かどうか ある項目を学んでから次の項目を学ぶのが適当である場合、項目

の提出順はおのずと決まる。(例 「て形」→「ている、ておく」など)

(2) 形が簡単な項目であるかどうか。形の簡単な項目は先に提出しやすい。

(3) 意味や使う場面などが理解しやすいかどうか。理解しやすい項目は先に出しやすい。

(4) コミュニケーション上、必要かどうか。多少複雑なものでも、コミュニケーションを成り立たせるために使うことが要求される項目は早く出す必要がある。最近の初級教科書では、たとえば『語学留学生のための日本語』(2002)で「のです」が10課に出されていることなどがその例として挙げられる。

(5) よく使われる項目かどうか。これに頻度が関わる。

(6) 類似の他の項目があるかないか。類似の項目がある場合、より基本的なものを先に提出する。

(7) 習得の順序があるならそれを考慮すべき。習得研究の結果が発表されていればそれを参考にする。

(4) のコミュニケーション上の必要性と (5) の頻度は考え方が近いであろう。

文法項目の提出を考える場合、頻度は多くの考慮すべきことのうちの一つであり、頻度が高いということが自動的に優先的に早く学ぶ項目であるということを意味しない。本稿で主張したいことは、文法項目の提出について考える場合、頻度を無視せず考慮にいれようということである。頻度のシラバスへの取り入れ方は二つの方法がある。

一つは、多様な文脈の中で比較的共通に頻度の高い項目を優先的に取り上げるということである。どの程度の頻度があるか、つまりよく使われる項目であるかどうかを考慮に入れて学習計画を立てることは、限られた時間の中で学ぶ学習者にとって効率的な学習につながるであろう。

もう一つは使う文脈ごとの頻度を考慮するということである。ある項目の重要度は話し言葉においてと書き言葉では異なる場合がある。重要度を単一のものと考えず、話し言葉ではどうか、書き言葉ではどうかであるか、理解した上で教材を組み立てるといいであろう。

頻度を取り入れて教材を考える場合、具体的には、二つの方法が挙げられる。

一つは使用項目と理解項目という考え方を文法についても取り入れることである。たとえば基本的ではあるけれども使用頻度が低い項目は理解項目という扱いにし、教科書の早い段階に提出するが、扱い方を軽くするよう指示しておく、などによって時間の節約が可能になるであろう。

もう一つは項目の整理である。ある項目を初級項目とするか、中級項目とするかを決める際に頻度の考え方も取り入れることを提案したい。その際、繰り返しになるが、難易度、他の類似項目があるかどうかなど、ほかの要素も考慮にいれなければならない。

本調査では提言はするが、実際にある項目をどのように扱うかはそれぞれの機関が学習者を見ながら判断していただきたい。

4 調査の方法

4-1 使用コーパスとその意義

本調査は、以下の3種のコーパスを用いて行った。3種のコーパスの文字数は各約15万字⁵⁾で、3種のコーパスの調査結果を比較できるようにした。

- (1) 会話コーパス… 『男性のことば・職場編』を使用。発話、場面、協力者コード等からなるデータベースから行番号と発話のみを取り、先頭から約15万字分をコーパスとして編集した。本コーパスは「男性のことば」「職場」というタイトルの通り、職場で働く男性が録音機を身につけ（または近くに置き）、その周囲の発話を記録したものである。これには女性の発話も含まれる。発話場面は、会議、打ち合わせ、報告などのフォーマルな場面のほか、雑談のようなインフォーマルな場面も含まれる。
- (2) 小説コーパス… 『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』から、筆者の性別、執筆年代、取り上げている話題などに偏りがないように配慮し、1960年代以降の作品から5作品を選択した⁶⁾。各小説から約3万字を取り、計約15万字のコーパスを作成した。
- (3) 新書コーパス… 『CASTL/J』に所収されている新書から、理系2冊、文系2冊を選び、計約15万字のコーパスを作成した⁷⁾。使用された文体は普通体が3冊、丁寧体が1冊である。コーパスの検索には『KWIC Finder Ver.3.20』および『KWIC Finder Ver.3.21a』⁸⁾を用いた。

このような多種類のコーパスをもとにした文法研究は、現在増えつづけている多様な学習者の学習に対応できる教育につながる。後に詳述するが、文法項目は、数の上でも用法の上でもコーパスによって違う振る舞いをするものが数多く見られる。これらの違いを記述し教育の現場で使うことは意味のあることである。

上述のように、本調査では社会人の会話、小説、新書という3つのコーパスを用いて調査を行った。これに対して、なぜ社会人の会話や新書で初級項目の検索をするのか、新書で初級項目を検索するのは無意味で、中級項目を調査するべきではないか、といった考え方もある。しかし、これにはいくつかの点から反論ができる。

第一に、項目の基本性を検証するという点があげられる。3級4級項目は何度も述べてきたように基本的とされている項目である。基本的であればどのようなコーパスにおいても使用されているはずであるが、果たしてそうであろうか。文法構成の上で基本的であるだけでなく、使用の上でも基本的であるかどうかを検証することは無意味なことではない。もしある項目が形の上では基本的であっても、どのコーパスでもあまり使われなかったら、その項目は教育の場で軽く扱うなどの方法をとることにより、教育・学習は効率的になるであろう。

第二に、学習者は日本語を使ってコミュニケーションを行うために学習をしている。現実には身の回りにある日本語のテキストに対し、初級で学んだことはどの程度有効なのかを知ることは意味があることであろう。

学習者の中には初級を45時間程度で学び、すぐに実生活で研究や生活をする研究生などもいる。それらの人々にとって、簡単な初級のあと、初級文法はどこまで役に立つのだろうか、どんな文法を与えればこのような人に手助けになるのだろうか。あるいは水谷（1992）が述べているように、話し言葉はほとんど必要なく、初級のあとすぐにコンピュータのマニュアルを読み、理解するような日本語の使い方をする人も一方にはいる。そのような人には、学術的な書き言葉の入門的なものである新書を用いた調査は意義がある。

第三にコーパスの違いに意味がある。社会人の会話は、学習者が丁寧で配慮のある話し方を身に着けるのに役に立つであろう。新書は大学で学ぶ学習者に有用であろう。大学で学ぶ学習者は初級中級が終わって大学に入ると、大学での参考書・教科書を読んだり講義を聴いたりする。そ

これらの学習者が専門書に入る前の段階として新書の内容・形式・表現などに慣れておくことは意味があると考え。また、小説に関しては、日本語学が主に小説や新聞から用例をとっており⁹⁾、それらの影響が日本語教育にあるか否かを検証するための調査対象と考えている。

初級項目は初級の文脈で調査をするべきであるという考え方もあるであろう。しかし、初級は、国内では3ヶ月で終わってしまう段階である。その言語使用のための調査は時間対効果の点で疑問がある。また、初級項目でできた文脈というのは何を指すのであろう。中級教科書、中級の日本語授業などが考えられるであろうが、最初に述べたように、学習者は中級教科書を学ぶために日本語を学んでいるのではなく、日本語を使って生活するために学んでいるのである。実生活の言語使用をもとに、まず初級項目つまり基本的な項目の調査をし、その後、中級項目の調査と同じコーパスを使ってすることが役に立つだろうと考えている。

本調査は各コーパスでの中級文法項目の調査を否定するものではない。順序として、まず初級文法項目の調査をし、それから中級文法項目の調査に入るべきだと考えている。

4-2 調査対象

上述の3種のコーパスを用い、『出題基準』の3、4級の文法項目を検索対象とする¹⁰⁾。『出題基準』は各級ごとに「A：文法事項」「B：表現意図等」に分類されており、Aは「A-I：文型／活用等」「A-II：助詞／指示詞／疑問詞等」に分かれている。本調査では4級にあげられている動詞・イ形容詞・ナ形容詞・名詞の「現在・肯定」「現在・否定」「過去・肯定」「過去・否定」の4形の丁寧体 (polite) と普通体 (plain) の活用は省き、いわゆる文型とされるものを対象とする。対象の3、4級の出題基準として提示されているのはのべ254項目である。本調査ではそのうち99の異なり項目と、補足6項目を検索した¹¹⁾。『出題基準』の項目であっても、検索後不要なデータを削除する手間のかかる助詞や形が一定しない連体修飾節などに関しては、今回は調査していない。

補足項目として検索したのは以下の項目である。

「Vてほしい」「のではない (か)」「ようだ (例示)」「ようだ (様態)」¹²⁾「みたいだ」「自発」これらは、『出題基準』にある関連項目との比較を目的として調査対象に含めた。各項目が何と関連しているかについては、巻末の別表1の備考欄に示した。

4-3 コーパスの大きさについて

今回のコーパスが量として小さく、代表性に欠ける点は認識している。なぜこのような調査をしているかは、初級項目の頻度を全体的に俯瞰してみたいと考えたためである。また、現在日本語において、代表性のあるコーパス、かつ文法のタグ付けのされたコーパスは十分に整備されているとはいえない。そのため、個人で用法分類などに着手できる範囲の調査ということで小さい範囲を想定した。特に低頻度項目に関しては偶然性が入る余地がある。

各項目内部の用法の調査は、必要に応じ、資料を足して、ある程度のデータの数を確保して行う予定である。

また、できれば、より多くのコーパスを比較したいと考えている。今後、友人の会話、新聞、論文、エッセイなどを同様に調査し、比較することで見えるものを探っていきたいと考えている。

5 データの分類について

各項目のデータを分類し出現数を集計する際には、以下の方針を用いた。

5-1 項目採用の基本方針

ある形がある形の中に含んでいる場合は両者をともに、重ねて採用した。また、活用するものはすべての活用形を採用した。「ている」を例に挙げると、過去形「ていた」、否定形「ていない」、テ形「ていて」、バ形「ていれば」等の各活用形が採用され、集計されている。また、同時に「ていれば」は文法形式の「ば」としても集計している。

出題基準項目として縮約形や口語体があげられていない場合も、縮約形や口語体が広く認められていると考えられれば調査対象とし、集計に含めた。例をあげると、「ておく」は「とく」を含み、「てしまう」は「ちゃう」を含んでいる。詳細は巻末の別表備考欄に示した。

例をあげる。「白衣なんかー、置いてきてるんでしょ↑」（会話コーパス）という文を分類すると、次の項目が採用される。

採用項目例1 「白衣なんかー、置いてきてるんでしょ↑」の場合、以下を採用

- ・「置いてきてる」の「てくる」
- ・「置いてきてる」の「ている」
- ・「きてるんでしょ」の「のだ」
- ・「きてるんでしょ」の「でしょう」

また、基本的に『出題基準』に従って項目をたてるため、例えば、「よね」という形は「よ」と「ね」に分解して各項目で集計されることになる。

採用項目例2 「ドリンクのですね↑」の場合以下を採用

- ・「よ」
- ・「ね」

5-2 用法分類について

各項目のうちいくつかは、『出題基準』が提示する用法と異なった用法を含む場合がある。

『出題基準』が提示する用法以外の用法を含んで集計しているものに、「ている」「でしょう」「だろう」「ても」などがある。これらは各用法の分類が困難であったため、合計の数値を提示している。集計に含まれている用法の具体例は巻末の別表の備考欄に示した。

また、『出題基準』が提示したものより細かい用法で分類し、集計したものもある¹³⁾。

6 調査結果

巻末の別表に調査結果を示す。これは、3種のコーパスにおける各項目の出現数の合計を降順で並べたものである。

分類番号とは『出題基準』に提示された分類番号である。Aは「文法事項」、Bは「表現意図

等」を示す。4級項目は、級の欄を網掛けにした。

7 3種類のコーパス全体での項目の分布状況

7-1 全体の分布

はじめに3種のコーパス全体、合計45万字の中での項目の分布を見てみよう。45万字はおおよそ新書6冊に相当する分量である¹⁴⁾。今回調査した99項目の全体の分布では図1のように、少数の高頻度項目と多数の低頻度項目が見られた。

項目の分布は表1のように、頻度50以下の項目が36項目で36%を占めている。頻度51以上の項目は、51～100が18%、101～200が16%、201～500が20%、501以上の高頻度項目は10%弱となっている。

頻度500以上の項目は数が少なく、これらの項目は他と比較して際立ってよく使われる項目といえる。具体的には「ている・のだ・受身・というN・から（格助詞）・から（理由）・と・ば」である。こうした項目は多少難易度が高いものがあったてもきちんと重視すべきなのではないか。一方頻度100以下の項目が約55%となっており、相対的に頻度の低い項目が多い。

次に3、4級の文法項目と出現頻度をコーパスごとに示そう。調査した99項目のうち、4級は

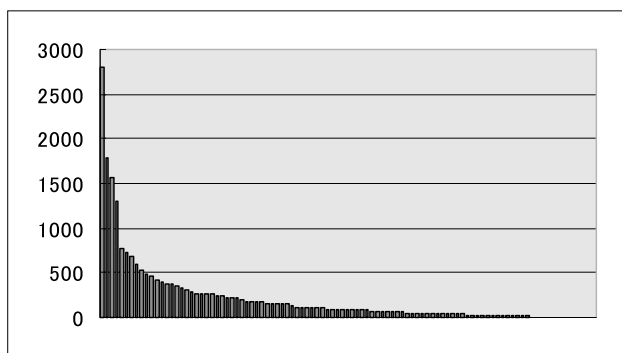


図1 3種のコーパス全体での項目の分布

表1 項目の頻度別の現れ方

頻 度	項目数	割 合
0	2	2.0%
1-10	11	11.1%
11-50	23	23.2%
51-100	18	18.2%
101-200	16	16.2%
201-500	20	20.2%
501以上	9	9.1%
合 計	99	100.0%

27項目、3級は72項目である。図2、3は級別に頻度が0回、1～10回、11～100回、101回以上であった項目の割合を示したものである。

図2の4級項目を見ると、会話コーパスでは頻度が0回以下の項目が7.4%、1～10回の低頻度項目が18.5%、11～100回の中頻度が40.7%、101回以上の高頻度項目が33.3%であり、頻度が10回以下のものが25%を超える。同様に小説、新書コーパスにおいても、頻度10回以下の低頻度項目はそれぞれ約30%、約41%と少なくない割合を見せている。

ここから、今回の調査では、4級項目には頻度の高い項目、中頻度の項目、低頻度の項目がまんべんなく含まれており、日本語教育の初期に学ぶ項目がすべて頻度の高いものであるとは限らないことがわかる。

図2で3種のコーパスを比較すると、会話・小説コーパスが類似しており、それらと新書コー

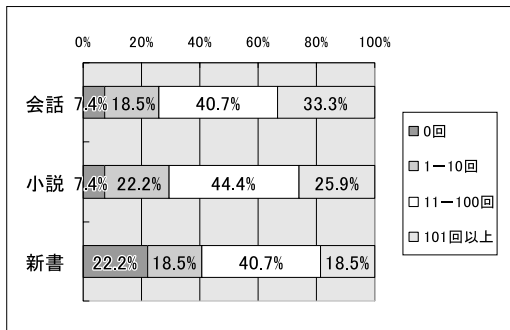


図2 4級項目の出現頻度

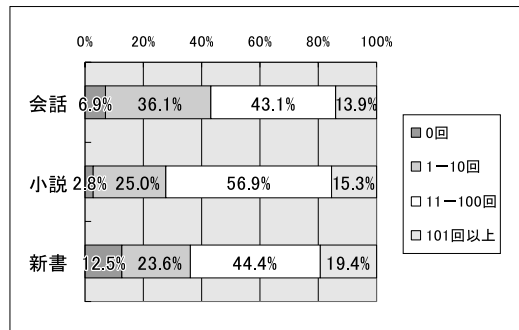


図3 3級項目の出現頻度

パスが対比を見せている。会話、小説コーパスにおいては出現頻度が11回以上のものが全体の70%を超えるが、新書コーパスにおいては60%に満たない。また、出現頻度が0回の文法項目は新書が最も多く22.2%である。

図3は、同様に72項目の3級の文法項目について示したものである。出現頻度が0回の項目は新書コーパスが最も多く12.5%、0～10回の低頻度項目は会話コーパスが最も多く43%、出現頻度が101回以上の高頻度項目は新書が最も多く19.4%であった。

3、4級項目の出現頻度を各コーパスごとに比較すると、級ごとに異なる振る舞いを見ることがわかる。会話コーパスでは、4級項目に比べて3級項目の方が低頻度の項目が多い。一方、小説コーパスでは3級項目の方が中頻度以上の項目が増える。新書コーパスは、3級のほうが出現数0回の項目が多いものの、中頻度以上の項目も増えている。

3種類のコーパス全体の中での関係のある項目、同一の活用形に続く項目の出現状況については以下で詳しく考察する。

7-2 活用形ごとにみる項目

初級教科書では動詞の活用形を定着させるためであろう、ある活用形を提示した際、それを使った文型を共に出し、それらを学ぶように作られているものが多い¹⁵⁾。この節では、動詞の活用形ごとに、それを使った項目がどの程度頻度があるかを見てみよう。

7-2-1 「ます」形に接続する項目

「Vたい」は頻度が高い。「ながら」「そうだ(様態)」はある程度頻度があるように見えるが、実際には小説に偏っており、それ以外のコーパスでは頻度があるとはいいにくい。「Vましょう」「Vなさい」などの項目は頻度がかなり低い。

表2 「ます」形に接続する項目

項目	合計	内訳		
		会話	小説	新書
Vたい	162	87	57	18
ながら	128	6	102	20
そうだ(様態)	91	12	75	4
Vやすい	46	10	4	32
Vにくい	32	3	5	24
Vましょう	23	4	4	15
Vなさい	9	2	7	0
Vたがる	5	2	1	2
Vませんか	1	0	1	0

7-2-2 「る」形に接続する項目

「ようになる」「ことになる」に対し、「ようにする」「ことにする」はどちらも頻度が低い。「こと(が)できる」「ことになる」「ために」「ようになる」「ることがある」はどれも新書でよく使われる。「こと(が)できる」は会話で頻度が低い、これは「Vること(が)できる」ではなく「N(が)できる」の形を使うためである。

表3 「る」形に接続する項目

項目	合計	内訳		
		会話	小説	新書
こと(が)できる	207	3	66	138
ことになる	187	21	57	109
ため(に)	163	12	61	90
Vようになる	78	5	16	57
Vることがある	77	6	11	60
～まえ(に)	61	36	13	12
ようにする	34	10	4	20
Vことにする	27	8	16	3
つもり(予定)	16	0	14	2

7-2-3 「た」形に接続する項目

「たり・たら・あとで」は頻度が十分にある。「ために」は新書では多いが、会話ではあまり使われない。「から」があるためであろう。

表4 「た」形に接続する項目

項目	合計	内訳		
		会話	小説	新書
たら	260	194	46	20
たり（文の数）	187	40	51	96
～あと（で）	86	14	44	28
Vたまま	53	12	33	8
Vたことがある	47	16	16	15

7-2-4 普通体に接続する項目

「とき・だろう」から「らしい」まで頻度が十分ある。「はず」が会話で少ないのが注目される。「そうだ（伝聞）」「Vところ」は頻度が低い。

表5 普通体に接続する項目

項目	合計	内訳		
		会話	小説	新書
とき	352	108	126	118
だろう	254	60	136	58
と思う	250	141	75	34
でしょう	221	144	22	55
かもしれない	154	39	87	28
はず	109	7	60	42
らしい（推量）	103	32	57	14
そうだ（伝聞）	12	3	5	4
Vところ	6	2	2	2

7-2-5 「ない」形に接続する項目

「なければならない」以外は頻度が低い。日本語では否定を明確に表現することを嫌うのだろうか。更に調査するべきである。

表6 「ない」形に接続する項目

項目	合計	内訳		
		会話	小説	新書
なければ／なきゃ ならない	87	18	11	58
Vないで	19	3	7	9
なくでもいい	12	6	3	3
ないで（ください）	7	2	5	0

初級では基本的な活用の形を学ぶことが重要なこととされ、それらの定着のためにいろいろな文法項目を練習する。しかし、中にはそれほど頻度の高くない項目もある。学習時間に制限があり、目的が明確な学習者には、初級項目のうち、軽く扱うことのできる項目がありそうである。

7-3 関係する項目の出現状況

次に項目間で意味が似ているなど、関係のある項目の3種類のコーパス全体の中での出現状況を見てみよう。今回は全体的な傾向を見ることに重点をおいており、項目間の比較は傾向と問題点をあげることにとどまっている。各項目内部の分析についてはそれぞれ稿を改めてとりあげるつもりである。

7-3-1 「ませんか」「ましょう」

「Vませんか」「Vましょう」を他の項目と比較するため「Vます」と並べてみた¹⁶⁾。「Vませんか」も「Vましょう」も非常に頻度が低い。相手に配慮する傾向が強い「Vませんか」のほうが「Vましょう」より更に低い頻度になっている。3種類のどのコーパスでも頻度が低い。

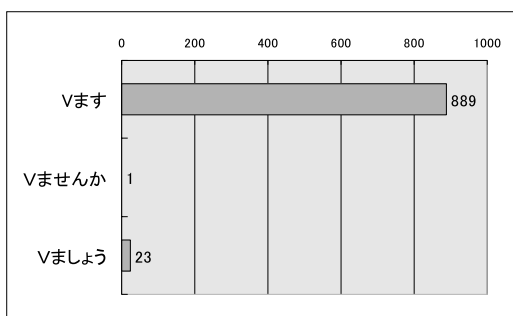


図4 「ませんか」「ましょう」(3種のコーパス合計)

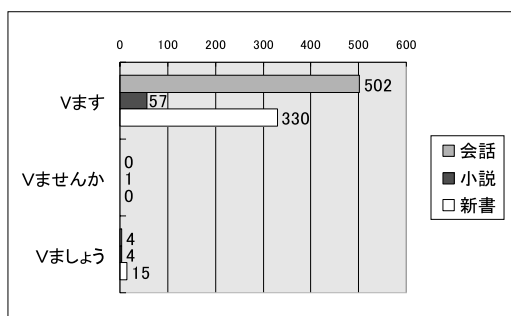


図5 「ませんか」「ましょう」(コーパス別)

鈴木(1997)は丁寧体と普通体の発話を分析し、丁寧体の発話の場合には話せることに制限があると述べている。《聞き手の私的領域》に踏み込んだ発話は不適切になるとして、《聞き手の私的領域》にはいる事柄を以下のようにあげている¹⁷⁾。

- 1) 聞き手の欲求・願望に関するもの 「たい・ほしい」など
- 2) 聞き手の感情・心理状態・感覚に関するもの 「うれしい・喜ぶ」など
- 3) 聞き手の意思決定に関するもの 「つもり・(よ)うと思う」など
- 4) 聞き手の能力・行為の実現可能性に関するもの 「できる」など

ここであげた「ましょう」は、呼びかけることによって聞き手の意思決定に踏み込む形式である。今回の調査は社会人の会話なので、聞き手に対する配慮が働き、頻度が低くなっているであろう。次回は友人の会話などでも頻度を調べてみる必要がある。

「Vませんか」については、動詞を特定して意向を聞くのではなく、「どうですか」とあいまいに相手の判断を求める形式を使うのではないだろうか。

・「ってゆうのはどうかな」(会話)

今後、「いかがですか」「どうですか」「よろしければ」「～でも」のような、聞き手に判断を委

ねる表現について検索をかけて調べてみる必要がある。

7-3-2 「たい」「たがる」「ほしい」「～てほしい（補足項目）」

「たい」がよく使われるのに対し、「たがる」はほとんど使われていない。これは実際には「たいと言っている」「たいうだ」などほかの表現を使うことによる。

『みんなの日本語』Iでは「たい」は提出されているが「たがる」には触れていない。「たがる」までぜひ教えなければならないか、考える必要があるだろう。

「ほしい」「てほしい」は頻度が高い。

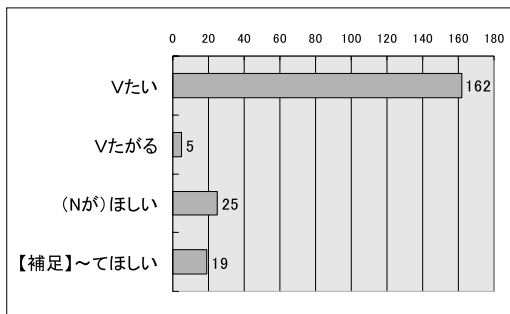


図6 希望・要求の表現（3種のコーパス合計）

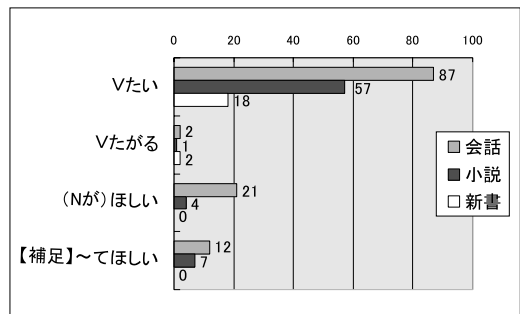


図7 希望・要求の表現（コーパス別）

7-3-3 依頼・命令の表現

「てください」が会話である程度出現するのに対し、「(を) ください」が非常に少ない。新書でこうした表現をしないのは文章の性質によることが簡単に理解できる。しかし、小説でも「(を) ください」が使われなのはなぜなのだろう。

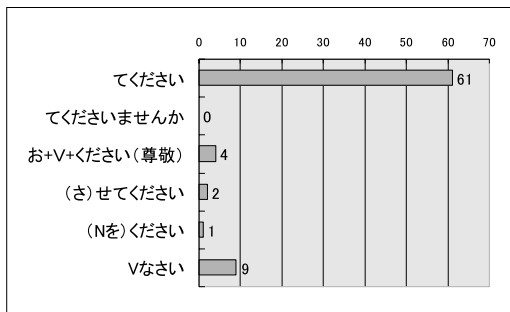


図8 依頼・命令の表現（3種のコーパス合計）

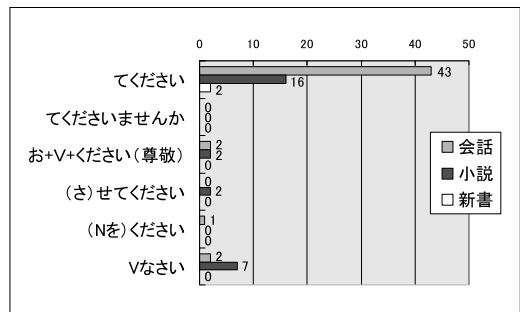


図9 依頼・命令の表現（コーパス別）

社会人の会話については鈴木（1997）の述べるように直接的な要求を避けていることが考えられる。次に『男性のことは』より買い物の例をあげる。

C：いらっしゃいませ↑

D：はい、いらっしゃませー↑

D：あ、いいですか、はい。

A：えーと315円ですね。

Cは薬局の販売員、Dは薬剤師、Aは薬局の経営者であり、これでひとつの会話が終わっているが、客は何も言わず買い物をしている。店頭の話では、このように客は「ください」のような表現をしないで意志を伝える例がいくつも見られた。

一方、「お願いします」について検索をかけてみたところ、会話では44例見つかり、そのうち、「よろしくお願いします」のように依頼で使われているものは40例であった。聞き手配慮の文脈では相手に対する要求を避け、話し手側の表現である「お願いします」などの形を使い、それを受け入れるかどうかの判断は相手にゆだねる形式をとるようである。これは、今回は非常に例が少ないので、大きな資料をもとに「くれる?」「もらえる?」「もらってもいい?」「いただけますか」など、関連するほかの形も一緒に、きちんと調査して結論を出すべきである。ここでも文法項目というより機能での考え方を取り入れる必要性が出ている。

「なさい」は小説では少数見られたが、社会人の会話では無視していいほどの頻度であった。「なさい」でこの頻度であるのだから、「しろ」系の命令は非常に少ないことが予想される。

7-3-4 「て」形に接続するもの

「ている」が他と大きく異なり、非常に頻度が高い。「ている」があまりにも頻度が高いため他の項目の頻度が低く見えるが、それぞれ頻度が100以上というのは相対的に頻度の高い項目である。

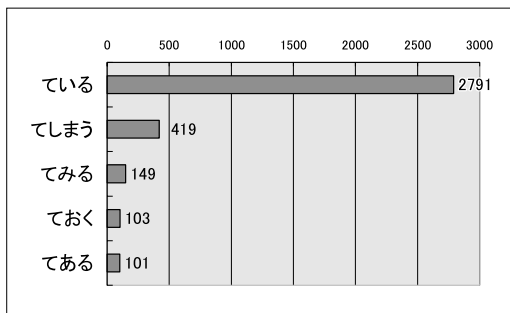


図10 「て」形+補助動詞（3種のコーパス合計）

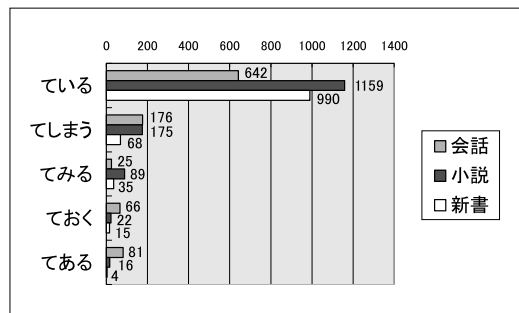


図11 「て」形+補助動詞（コーパス別）

「ている」は多くの用法があり中上級になっても習得されていない用法もあることが報告されている（許2000）。「ている」に関しては、初級だけでなく中上級でもとりあげ、繰り返し学習する必要がある。

「てある」は初級教科書では「ている」と同時に上げられることが多かったが（『日本語初歩』など）、最近「ている」と「てある」を別個に上げる教科書がある（『みんなの日本語』『新文化初級日本語』など）。頻度の点から言うならば、「ている」と「てある」は同じ重要性とはいえないようである。

コーパス別に見ると、「てみる」が小説に、「ておく」「てある」が会話に偏って出現しており、「てある」が新書であまり使われないのが注目される。これらの用法については稿を改めて検討したい。

7-3-5 やりもらい

「てあげる・てやる・てさしあげる」を「てあげる」系、「てもらう・ていただく」を「ていただく」系、「てくれる・てくださる」を「てくれる」系とまとめたところ（図12）、この3者の中では「てあげる」系の頻度が低いことがわかる。

コーパス別に見ると（図14）、「てあげる」はどのコーパスでも頻度が低い、「てやる」は小説では多少使われている。小説では相手が存在するのではない虚構なので「てやる」が使えるのに対し、実際の会話では相手の前で「てやる」は使いにくい。会話の中では「てもらう」に対し「ていただく」の頻度が比較的高い。これは丁寧な依頼や希望の用法である。男性の職場会話では「ていただく」を使ってやわらかく丁寧に、直接的でない要求がよく使われる。

- ・「同数届きますので、そちらのほうで運用していただければ、と思いますのでー。」
- ・「具体的に、商品の発売時に、あの一、あげていただかないと、こちらとしても、どれぐらいいとっていいのかってゆったことが予測がつかないんです」

「やりもらい」についても、新書での頻度は非常に低い。新書は論理的に事柄を述べることを目的としている文章であり、対人配慮をする会話や人と人の関係を述べる小説との違いが出ている。

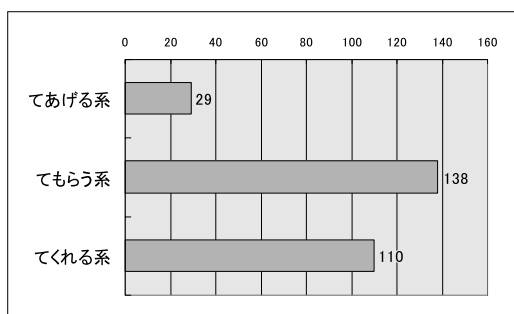


図12 系統別やりもらい（3種のコーパス合計）

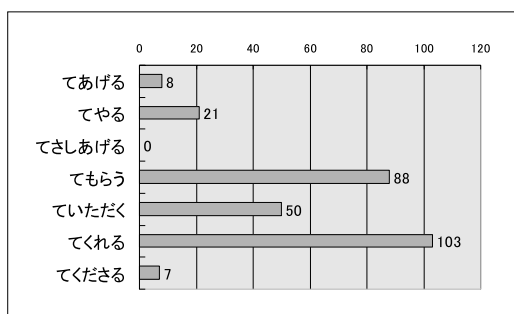


図13 やりもらい（3種のコーパス合計）

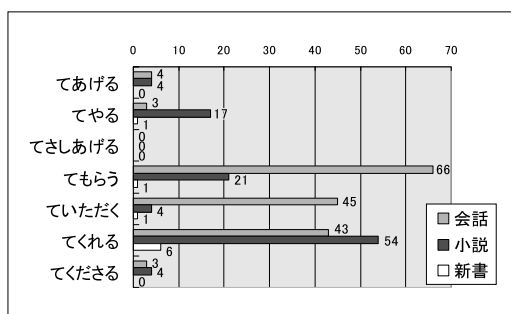


図14 やりもらい（コーパス別）

7-3-6 「てもいい」「なくてもいい」

「てもいい」の多さに比べ、禁止の「てはいけない」は非常に頻度が低い。一方、「なくてもいい」が低頻度なのに対し、「なければならぬ」「なくてはならない」は頻度が高い。禁止表現が低頻度なのはさきほどから何度も述べている相手の行動を直接的にしばる表現だからであろう。

「なければならない」は新書で多く見られる。新書での「なければならない」は社会的な規範のような用法であり、話し言葉での個人的な必要を述べる用法とは異なった使い方がされている傾向がある（小西2006）。

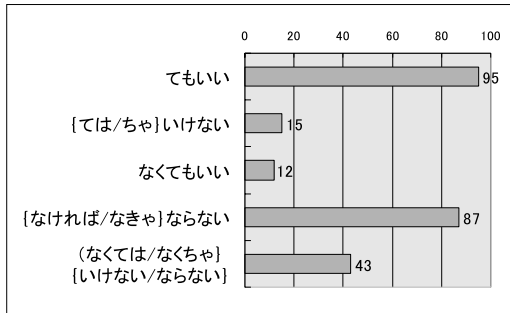


図15 許可・禁止・義務（3種のコーパス合計）

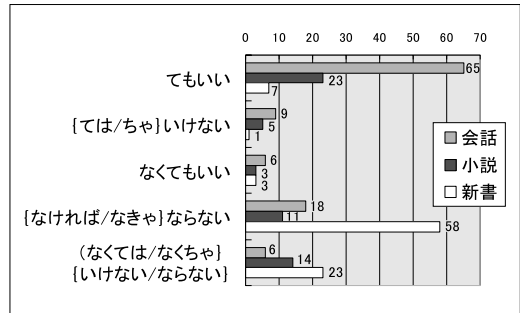


図16 許可・禁止・義務（コーパス別）

7-3-7 「ようだ」と「みたいだ」

「ようだ」と「みたいだ」は「ようだ」がかなりよく使われるのに対し、「みたいだ」はそれほど使われていない。

野田（2005）は「実際の会話では「らしい」や「ようだ」はあまり使われず、「みたいだ」がよく使われる。聞いたり話したりすることを目的とした文法では「みたいだ」だけを取り上げるのが効率的である」と述べている¹⁸⁾。実際、会話では「みたいだ」と例示の「ようだ」が使われる。しかし、図18のコーパス別のデータは「ようだ」は用法別に分類しているのに対し、「みたいだ」は上の4つの用法すべてを合わせた数である。同じ基準で比較するため会話の中での「ようだ」と「みたいだ」を用法に分類しない数で比べると、「ようだ」が85例に対し「みたいだ」は51例と実際の会話での使われ方を見ても、決して「みたいだ」が多いとは言い切れない。

図18のコーパス別の使用状況を見ると、「ようだ」はコーパスによって用法に大きな偏りがあることがわかる。新書では「例示」と「様態」、小説では「比喩」の用法が多いことが分かる。

- ・ 予算も、武器のようなモノにはつきやすいが、情報という形にならないものに関しては削られやすい。（新書）（例示）
- ・ イギリスはご存知のように封建的でね。（新書）（様態）
- ・ 心臓が、割れたピンポン玉のようににはずみだす。（小説）（比喩）

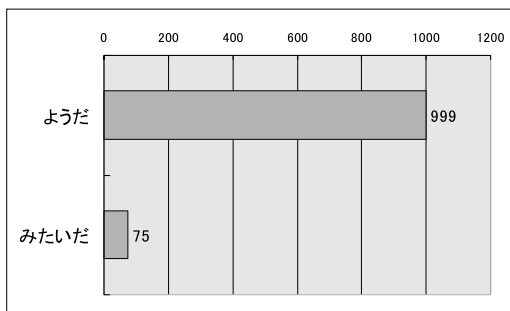


図17 「ようだ」「みたいだ」（3種のコーパス合計）

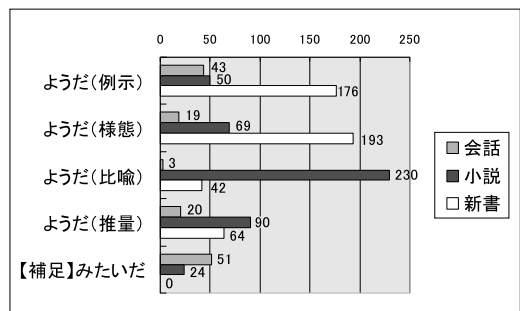


図18 「ようだ」「みたいだ」（コーパス別）

新書が「このように」「前に述べたように」のように内容をまとめながら語ったり、例を示しながら述べるのに対し、小説では具体的イメージを膨らませるべく比喩を使うという述べ方の違いが現れているといえよう。

一方「みたいだ」は今回の資料ではまだ用法に分類していないが、会話に多く、小説でも使われている。新書では0であり、話し言葉の項目であることがわかる。

このほかにも、条件表現、受身と使役、「とき」と「ところ」など興味を引く項目はあるが、紙幅の関係でそれらは別の機会に述べたい。

8 コーパス別の特徴

8-1 レジスター研究としての位置づけ

文章や談話は話題、目的、対人関係、場面などによってさまざまなタイプに分けることができる。このような社会的状況に応じて人が使い分ける言語変種をレジスター（言語使用域）と呼ぶ（Biber他1998）。たとえば、話し言葉のレジスターと書き言葉のレジスターは異なっているし、さらに書き言葉であってもレポートと友人へのメールのレジスターは異なっている。

そのため、会話・小説・新書コーパスに現れる文法項目を比較することは、レジスターの比較研究に位置づけられる。総合的なレジスター調査のためには、1) 多数のテキストの分析、2) 広範にわたる言語的特徴を考慮する、3) レジスター間の比較を行う、という3つの要件が必要になる（Biber他1998 p 149）。また、レジスター間の比較を行う際に、どの言語項目を比較すればよいかという判断も必要になる。本研究は、日本語能力試験3、4級項目に限った調査であり、母体となるコーパスの規模も限られたものではあるが、大規模なコーパスを用いた総合的なレジスター調査に先立った基礎的研究と位置づけられる。つまり、レジスター間の調査を行う場合にどのような文法項目に着目すればよいかという点において、示唆が得られると考えられる。

8-2 調査対象とする項目

3、4級項目のうち活用形を除いた99項目を抜き出し、コーパスごとに頻度順に並べたうえでそれぞれの上位30項目を抜き出した（表7）。本節では、上位30項目を高頻度で出現した文法項目ととらえ、これらを対象として3種のコーパスを比較する。

表7において分類欄に「◆」で示したものは3種のコーパスに共通して上位30位までに入った項目である。「△」「◎」「×」は2種のコーパスに共通して上位30位にまでに入った項目である。具体的には、「△」は会話コーパスと小説コーパス、「◎」は小説コーパスと新書コーパス、「×」は会話コーパスと新書コーパスにおいて上位30位までに入ったものを示す。分類欄が空白のものは、該当コーパスのみにおいて上位30位に入ったものである。以下、それぞれについて具体的に考察する。

8-3 3種のコーパスに共通する高頻度項目

3種のコーパスに共通する高頻度項目は以下の通りである。4級から6項目、3級から8項目の計15項目である。

表7 コーパス別頻度表（上位30項目）

【会話コーパス】				【小説コーパス】				【新書コーパス】			
	項目	頻度	分類		項目	頻度	分類		項目	頻度	分類
1	のだ	1001	◆	1	ている	1159	◆	1	ている	990	◆
2	ている	642	◆	2	のだ	633	◆	2	受身	956	◆
3	ね	420		3	受身	489	◆	3	というN	682	◆
4	よ	391	△	4	から (from)	292	◆	4	から (from)	284	◆
5	というN	357	◆	5	というN	262	◆	5	から (理由)	276	◆
6	から (理由)	300	◆	6	と	258	◆	6	ても	271	◆
7	から (from)	206	◆	7	ようだ (比喩)	230		7	と	262	◆
8	ので	205	×	8	てしまう	175	◆	8	ば	251	◆
9	たら	194		9	ても	173	◆	9	ようだ (様態)	193	◎
10	てしまう	176	◆	10	ば	170	◆	10	ようだ (例示)	176	
11	と	171	◆	11	てくる	159	◆	11	と言う	171	◆
12	ば	164	◆	12	から (理由)	142	◆	12	のだ	150	◆
13	でしょう	144		13	だろう	136	◎	13	ことができる	138	◎
14	と思う	141	△	14	まで	132	◆	14	可能形 ((られ)る)	136	◆
15	可能形 ((られ)る)	129	◆	15	とき	126	◆	15	てくる	132	◆
16	もう	123	△	16	と言う	116	◆	16	とき	118	◆
17	受身	113	◆	17	使役 (せる／させる)	115	◎	17	ていく	118	◎
18	とき	108	◆	18	ながら	102		18	ので	114	×
19	てくる	102	◆	19	可能形 ((られ)る)	99	◆	19	ことになる	109	
20	と言う	98	◆	20	ようだ (推量)	90	◎	20	AよりB (比較)	98	
21	まで	90	◆	21	てみる	89		21	たり (文の数)	96	
22	Vたい	87		22	かもしれない	87		22	ため(に) (目的)	90	
23	ても	82	◆	23	ていく	84	◎	23	ため(に) (原因)	77	
24	である	81		24	もう	82	△	24	まで	76	◆
25	【補足】 のではない(か)	74		25	よ	81	△	25	使役 (せる／させる)	72	◎
26	ておく	66		26	と思う	75	△	26	てしまう	68	◆
27	てもらう	66		27	そうだ (様態)	75		27	ようだ (推量)	64	◎
28	てもいい	65		28	ようだ (様態)	69	◎	28	Vことがある	60	
29	まだ	64	△	29	ことができる	66	◎	29	だろう	58	◎
30	だろう	60		30	まだ	63	△	30	なければ／ない きゃ ならない	58	

凡例： ◆ 3種に共通 △ 会話・小説で共通 ◎ 小説・新書で共通 × 会話・新書で共通

(1) 3種のコーパスに共通する高頻度項目

4級項目：「ている」「というN」「から (from)」「から (理由)」「とき」「まで」

3級項目：「のだ」「受身」「と」「ば」「ても」「てしまう」「てくる」「と言う」「可能形 ((られ) る)」

これら16項目を見ると、格助詞、複文を作る要素、文末の要素の3つに大別できる。

格助詞には「から (from)」と「まで」がある。格助詞の中で調査対象としたのはこの2項目の

みであるため、他の格助詞を調査対象としていた場合は、それらが上位にあがったと予想される。

複文を作る要素としては「というN」「から（理由）」「とき」「と」「ば」「ても」がある。名詞節を作る「というN」をはじめ、原因・理由の従属節、時を表す従属節、条件や譲歩を表す従属節がある¹⁹⁾。

文末の要素はて形の補助動詞とその他にわけられる。て形の補助動詞としては「ている」「てしまう」「てくる」があがった。これらは会話コーパスでは「てる」「ちゃう」など縮約形が用いられているため注意が必要である。その他として「と言う」「受身」「のだ」がある。「受身」や「のだ」は初級における習得困難項目とされることが多いが（野田2005など）、本調査に関する限り、出現頻度は大変高い。

8-4 各コーパスにおける高頻度項目の特徴

次に、他のコーパスと比較しながら各コーパスにおける高頻度項目の特徴をみる。各コーパスの高頻度項目は上位30項目のうち15項目が3種に共通した項目であったが、その他の15項目にはコーパスごとの特徴が表れている。以下に具体的に示す。

8-4-1 会話コーパスにおける高頻度項目

会話コーパスにのみ出現した高頻度項目は10項目、会話コーパスを含む2種のコーパスで出現した高頻度項目は5項目であった。これらを分析すると以下の6つの特徴が挙げられ、それぞれ以下の文法項目が当てはまる。

(1) 一人称主語を取るもの：「てもらう」「Vたい」「と思う」

これらは一人称主語を取り、「私の視点」から語る表現であると言えるだろう。

(2) 聞き手との関係構築に関わるもの：「だろう」「でしょう」「ね」「よ」

会話コーパスにおける「だろう」「でしょう」は「だろう」の30%、「でしょう」の73%が確認の用法で用いられていた。これらは聞き手がいなければ用いられない。同様に終助詞「ね」「よ」も聞き手めあてのモダリティであるため、これらは聞き手との関係構築に関わる項目であると言える。

(3) 条件に関するもの：「たら」「てもいい」

条件を表すとして3、4級で取り上げられる「ば」「と」「たら」「なら」のうち、「ば」「と」は3つのコーパスで共通して高頻度であったが、「たら」は会話コーパスにおいてのみ高頻度であった。また「てもいい」は「Nでいい」といった譲歩に関わる表現が多い。

(4) 理由に関するもの：「ので」

理由の表現に関しては「から」が3種のコーパスに共通して高頻度項目として現れたが、「ので」は会話コーパスと新書コーパスにおいてのみ現れた。

(5) て形の補助動詞：「てある」「ておく」

谷口（2000）は「ておく」に事態の終結を表わす機能があるとして、事後処置、心理的な充足行為、結語の用法について説明している。会話で「ておく」が多いのは、相手を前に、事後処置について述べたり自身の心理的な充足について説明したりすることと関係があると考えられる。

これらをまとめると、会話コーパスに特徴的にあらわれる高頻度項目は、語り手の視点に立ちながら、聞き手との関係構築や、聞き手への働きかけに関わる項目という特徴を持っていると言えるだろう。

8-4-2 小説コーパスにおける高頻度項目

小説コーパスのみに出現した高頻度項目は5項目、小説コーパスを含む2種のコーパスに出現した高頻度項目は10項目である。これらを分析すると以下の4つの特徴が挙げられ、それぞれ以下の文法項目が当てはまる。

(1) 描写や説明に関わるもの：「ながら」「ようだ（比喩）」「そうだ（様態）」

付帯状況を表す「ながら」や「ようだ（比喩）」、「そうだ（様態）」は状況を描写したり説明するときに用いられる表現である。他のコーパスでは出現頻度が低いことから、これらは小説に特徴的な表現であると言える²⁰⁾。

(2) 推量、判断に関わるもの：「だろう」「ようだ（推量）」「かもしれない」

推量や判断に関する表現は、小説コーパスでは登場人物の心情を述べる場合に用いられる。小説は登場人物の行動や心情を描写しながら進む。会話において語り手が何かを語る場合にも、推量したり判断したりということはある。しかしここで取り上げた「だろう」「ようだ」は音声言語ではあまり用いられず、文字言語において頻度が高いものである²¹⁾。

(3) 文の構造に関わるもの：使役

使役を用いた文は「いわゆる使役」の「理亜を絨緞の上に坐らせると…」（『一瞬の夏』）のように使役主による動作の使役をあらわすタイプ、「トセの言葉が何となく信夫を不快にさせた。」（『塩狩峠』）のように無生物主語をとり、主に被使役者の感情感覚の動きを述べるタイプ、「（砂は）梁なんかだつて、すぐにおよぶよに腐らせてしまうんですからねえ。」（『砂の女』）などのように被使役者の意志が感じられない他動詞的な用法のものなど、多彩な使われ方をしている。

小説では使役の形で表現できることを広く使い、多様な表現を試みていると言える。他のコーパスでの使役と違うところは、人が人に仕向ける「いわゆる使役」がかなり見られた点である。

(4) て形の補助動詞：「てみる」

「てみる」は、小説コーパスにおいては「てみる」全体で89例あるうち、「てみた。」の形で使われている例が19例と最も多く、「てみたが、」も8例ある。他のコーパスでは新書に各1例あるのみである。これらは次に示す例文のように登場人物の行為の描写や、説明として使われている例と言えるだろう。

・内藤の顔を座りなおして思いうかべてみた。（『一瞬の夏』）

・私はためしに咳払いをしてみた。（『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』）

これらをまとめると、小説コーパスに特徴的にあらわれる高頻度項目は、登場人物や出来事の推移、状況の描写に関わる項目であると言えるだろう。

8-4-3 新書コーパスにおける高頻度項目

新書コーパスのみに出現した高頻度項目は8項目、新書コーパスを含む2種のコーパスに出現した高頻度項目は7項目である。これらを分析すると以下の6つの特徴が挙げられ、それぞれ以下の文法項目が当てはまる。

- (1) 説明に関わるもの：「ようだ（様態）」「ようだ（例示）」「Vたり」「ことがある」「AよりB」「ことになる」「Vようになる」

これらの表現は説明に関わる表現であると言えるが、小説コーパスに現れたものとは傾向が異なる。これらは論理的に状況を説明したり、物事の推移を説明したりする表現であると言える。変化を表す表現（「ことになる」「Vようになる」）により物事の推移を説明し、比較の表現（「AよりB」）や「ようだ（様態）」「ようだ（例示）」によって事物や現象をより具体的に説明すると言える。

- (2) 論理的に議論を進める表現：「ために（目的）」「なければならない」

新書というジャンルは書き手が読み手に知識を伝えるという側面があり、論理的に議論が進む。そのような場合、目的を述べたり、「このような場合は、こうでなければならない」といった客観的な必然性を述べると言える。

- (3) 理由：「ために（理由）」

理由の表現「から」は3種のコーパスに共通して高頻度で現れたが、「ために」は新書コーパスにおいてのみ高頻度で現れた。

- (4) て形の補助動詞：「ていく」

「てくる」は3種のコーパスに共通して高頻度で現れたが、「ていく」が新書コーパスと小説コーパスにおいて高頻度で現れた。つまり、これらの2種のコーパスでは「現在」という時間軸や、「ここ」という場所軸を基本として、過去と未来、「くる」と「いく」の双方向の視点で語る特徴があると言えよう。

これらをまとめると、新書コーパスに特徴的にあらわれる高頻度項目は、物事の有様や変化について具体的に述べ、論理的に議論を進めることに関する項目であると言えるだろう。

9 まとめ

最初にたてた問題に答える形でまとめをしよう。

<1> 現実の言語生活に比較的近い文脈での3級4級の文法項目の使用実態

- (1) 社会人の会話・小説・新書のコーパスで3級4級の文法項目の頻度調査をしたところ、少数の高頻度項目と比較的多数の低頻度項目が見られた。3級4級項目といっても使用頻度の高いものも低いものもあり、基本的な項目だから使用頻度が高いとは必ずしもいえない。

- (2) 4級項目では新書で、3級項目では会話と新書で低頻度項目の割合が高い。

<2> 文法項目の基本的性とはどんなことか。

文法項目が基本的であるということには以下の条件が関わると考えられる。

- (1) 基本的な形であること 基本的な活用形など

- (2) 他の項目の要素となるもの 「て形」「ない形」など
- (3) それがなければ文が構成しにくいもの 格助詞など
- (4) 頻度がある程度あるもの
- (5) どのテキストでも使われるもの

(1) の基本的な形について言えば、実際の文は、その構成要素の形が基本的なものであるかどうかとは別の考え方で文法項目を選んで組み立てられている場合があることがわかった。会話については聞き手に配慮すること、聞き手の領域に踏み込まないことのほうが文法項目が基本的かどうかより優先され、新書においては論理的な文章を構成することのほうが重要視される。

(2) の、他の項目の要素となるかどうか、についても、たとえば「ない」形のように、それを使った形があまり使われないものもある。これについてはさらに調査が必要であるが、日本語は否定的な表現を避ける傾向があると言えそうである。

(3) の、それがなければ文が構成しにくいもの、には今回の調査で得られた3種のコーパスで共通に上位に入ったものがあげられる。この中には従来習得困難項目とされるものも含まれているが、実際の使用ではそれらの項目が重要であるということは意識しておく必要があるであろう。

(4) の頻度がある程度あること、というのは、今回のような小さな調査ではどの程度なのかは明確にできなかった。どの程度頻度があれば重要な項目であるといえるのかは調査を重ねることによって明らかにしていきたい。

<3> 学習者の多様化に対応する文法

今回の調査では3種類のどのコーパスでも使われるものをあげた。これらは、本調査の限りでは、多くの学習者にとって重要な項目といえるであろう。

一方、コーパスごとの高頻度項目から各テキストの性質をさぐったところ、

- (1) 会話では「私の視点」から物事を述べる表現、聞き手との関係を構築するためのもの
- (2) 小説では描写や推量に関する項目
- (3) 新書では説明に関わる表現、論理的に述べていく表現

が見られた。これらのテキストの特質を知り、学習者のニーズと照らし合わせることにより、学習・教育は効率的にできる可能性がある。

今回は大まかにコーパス全体を見通すことを目的としたが、本稿で問題の糸口が見つかった部分については、資料を増やしたり、別の角度から検索をしたりして、調べていきたいと考えている。

注

- 1) 日本語教育学会春季大会当日の配布資料による。
- 2) 佐治 (1989) p133
- 3) p133の表にあげられている項目のうち『出題基準』の3級4級項目に出ていないものは「つつある・ことだ・ものだ・わけだ・ぞ・ぜ・とも (終助詞)・さ (終助詞)」などである。
- 4) <資料5>言語機能と一般的な概念の一覧表pp142-146、<資料6>オーディオリンガル・メソッドと機能・概念アプローチの対比pp147-148
- 5) 文字数のカウントにはワードの「文字カウント」機能を使用した。

- 6) 選択した作品は次の通りである。1) 安部公房 (1962) 『砂の女』、2) 三浦綾子 (1973) 『塩狩峠』、3) 村上春樹 (1988) 『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』、4) 沢木耕太郎 (1994) 『一瞬の夏』、5) 塩野七生 (1991) 『コンスタンティノーブルの陥落』。冒頭から約1.5万字、終わりから約1.5万字とし、各作品3万字とした。
- 7) 選択した新書は次の通りである (書名末尾に取得した文字数と使用文体を記す)。文科系は次の2冊である。1) 中根千枝 (1967) 『タテ社会の人間関係』講談社現代新書; 約4.2万字; 普通体 2) 中川剛 (1989) 『日本人の法感覚』講談社現代新書; 約3.3万字; 普通体 理系は次の2冊である。1) 吉岡郁夫 (1986) 『人体の不思議』講談社現代新書; 約3.9万字; 普通体 2) 千葉康則 (1991) 『記憶の脳生理学』講談社ブルーバックス; 約3.6万字; 丁寧体
- 8) ビューアを内蔵したGREP検索・KWICコンコーダンサー。開発者はhishida。
- 9) 『日本語文法』2007年3月号、2006年9月号、2006年3月号の19論文の資料を調べてみた。そのうち、現代語で例を出している論文13本を見たところ、作例によるもの5本、小説を使ったもの7本、多様な資料を使ったもの1本となった。小説を使った論文のうち小説+新聞がもっとも多く4本であり、そのほかは小説+作例、小説+会話、小説+1本であった。これまでは簡単に使えるコーパスが『CD-ROM版新潮文庫の100冊』と新聞のデータであったことが関係しているであろう。
- 10) 『日本語能力試験主題基準【改訂版】』(1994) pp125-139を参照。
- 11) 3、4級出題基準の「のべ254項目」というのは語数、文型数ではなく、出題基準において1項目とみなしうる提示のされ方をしていた項目数である。具体的に述べると、格助詞類という大項目のなかには、小項目が8つ「ガ」「ヲ」「デ」「ヘ」「ト」「カラ、マデ」「ヤ」「ノ」のように立てられている。そのため、項目数を数えるときは「カラ、マデ」は分解せず、計8項目として集計した。また、「疑問詞+カ」として「ナニカ、ダレカ、ドコカ等」という1項目が立てられている場合があるが、「等」で示される語を集計することができないため、これは1項目とした。しかし頻度の調査では、各異なり語/文型ごとに検索結果を提示する関係上、上述のような「カラ、マデ」は「カラ」「マデ」のように異なる2種に分解して提示している。
- 12) 「様態」の「ようだ」は『出題基準』には入っていないが、国立国語研究所 (1987) では「内容を指示することを表わす。ある事物が他の事物に等しいという関係」(p276)と分類されているものである。
- 13) 詳細は別表参照。
- 14) 鈴木庸子 (2004) p28に5冊の新書の文字数が書いてあるが、7万8千字から8万9千字の間で平均8万5千字である。
- 15) 例えば、『みんなの日本語』I では第14課で「て」形が提出され、それとともに「てください」「ています」を学ぶ。続いて第15課では「てもいい」「てはいけない」「ている (状態)」を学習することになっている。
- 16) 動詞の活用形のひとつである「Vます」は本稿では具体的な調査対象としていないため、別表には含まれていない。
- 17) 鈴木 (1997) p59
- 18) 野田 (2005) p4
- 19) 「ても」は「譲歩」だけではなく「疑問詞+ても」「並立」なども含まれている (別表備考欄参照)
- 20) 7-2-1の表2を参照
- 21) 7-3-7図18の「ようだ (推量)」参照

参考文献

- ・青木玲子 (1977) 「使役-自動詞・他動詞との関わりにおいて」 須賀一好編 『動詞の自他』、pp108-

- ・ 川口義一 (1996)「日本語指導の文脈化」鎌田修・山内博之編『日本語教育・異文化間コミュニケーション』北海道国際交流センター
- ・ 許 夏珮 (2000)「自然発話における日本語学習者による「テイル」の習得研究」『日本語教育』104、pp20-29 日本語教育学会
- ・ 現代日本語研究会編 (2002)『男性のことば・職場編』ひつじ書房
- ・ 江田すみれ (2005)「テキストの種類による条件表現の現れ方」『ヨーロッパ日本語教育』10、pp171-176、ヨーロッパ日本語教師会
- ・ 江田すみれ・小西円ほか (2006)「日本語の使用実態からの日本語教育文法再考」『日本語教育学会秋季大会予稿集』pp250-261、日本語教育学会
- ・ 小西円 (2006)「コーパス別に見たモダリティ (義務・推量・「のだ」)」『日本語の使用実態からの日本語教育文法再考』『日本語教育学会秋季大会予稿集』250-261、日本語教育学会
- ・ 小林ミナ (2002)「日本語教育における教育文法」『日本語文法』日本語文法学会
- ・ 国際交流基金 (1994)『日本語能力試験出題基準』凡人社
- ・ 国立国語研究所 (1988)『現代語の助詞・助動詞―用法と実践―』秀英出版
- ・ 佐治圭三 (1989)「文法」『日本語概説』桜楓社
- ・ 鈴木睦 (1997)「日本語教育における丁寧体世界と普通体世界」田窪行則編『視点と言語行動』、pp45-76 くろしお出版
- ・ 鈴木睦・筒井佐代 (2001、2002)「日本語機能文型試用版 (1)(2)」大阪外国語大学『多文化共存時代の言語教育』教育研究学内特別経費プロジェクト研究成果報告書 (2)(3)
- ・ 鈴木睦 (2003)「コミュニケーションからみた勧誘のしくみ―日本語教育の視点から―」『社会言語科学』6-1、pp112-121
- ・ 鈴木睦 (2006)「話し言葉の教育内容再考」「日本語の使用実態からの日本語教育文法再考」『日本語教育学会秋季大会予稿集』pp250-261、日本語教育学会
- ・ 鈴木庸子 (2004)「新書の文章における「ようだ」の用例について―日本語教育の観点から―」『国文目白』44、pp27-39、日本女子大学国語国文学会
- ・ 谷口秀治 (2000)「「～ておく」に関する一考察―終結性を持つ用法を中心に―」『日本語教育』104、1-9 日本語教育学会
- ・ 西口光一 (1995)『日本語教授法を理解する本 歴史と理論編』バベルプレス
- ・ 日本語記述文法研究会編 (2003)『現代日本語文法 4 第8部モダリティ』くろしお出版
- ・ 野田尚史編 (2005)「コミュニケーションのための日本語教育文法の設計図」野田尚史編『コミュニケーションのための日本語教育文法』、pp1-20 くろしお出版
- ・ フォード丹羽順子 (2005)「コミュニケーション能力を高める日本語教育文法」野田尚史編『コミュニケーションのための日本語教育文法』、pp.105-126、くろしお出版
- ・ 水谷修 (1992)「日本語教育学の構築をめざして」『文化言語学その提言と建設』、pp.11-26 三省堂
- ・ 森山卓郎 (1992)「文末思考動詞「思う」をめぐる」『日本語学』11、pp105-116、明治書院
- ・ ヨーロッパ日本語教師会 (2005)『ヨーロッパにおける日本語教育とCommon European Framework of Reference for Languages』国際交流基金
- ・ Douglas Biber, Susan Conrad and Randi Reppen. 1998. *Corpus Linguistics: Investigating language structure and use*. Cambridge University Press (斉藤俊雄・朝尾幸次郎・山崎俊次・新井洋一・梅咲敦子・塚本聡共訳 (2003)『コーパス言語学 言語構造と用法の研究』南雲堂)

3種類のコーパスを用いた3級4級文法項目の使用頻度調査とその考察

【別表1】 出現頻度順3、4級文法項目（文型）

通し 番号	級	分類番号	項目	文法リストの説明	会話	小説	新書	合計	備考
1	4	A-I-20 B-12	ている	時間関係：前後1	642	1159	990	2791	「Vてる」「Vてない」を含む。「進行」「結果」の用法共に含む。
2	3	B-74	のだ	その他5	1001	633	150	1784	「のだ」「のです」「んだ」「んです」を含む。従属節末・主文末のどちらに現れるものも含む。
3	3	A-I-1	受身	受身	113	489	956	1558	
4	4	B-21	というN	名称の導入	357	262	682	1301	「と」「は」「って」を含む。「いう」は「ゆう」を含む。
5	4	A-II-3a	から	格助詞	206	292	284	782	例：2時から5時まで。「これから」「それから」は含まない。
6	4	B-23	から	理由2	300	142	276	718	「だから」は含まない。新書には「から」といって」が11例含まれている。
7	3	B-43	と	条件4	171	258	262	691	色々な用法を含む。
8	3	B-40	ば	条件1	164	170	251	585	
9	3	B-45	ても	譲歩	82	173	271	526	「ても」の用法分類は困難なため、「譲歩」「疑問詞+ても」「並立」など全ての用法を含む。
10	4	A-II-3d	ね	終助詞	420	60	5	485	「ね。」「ね。」という文字列で検索。倒置的な例（指導しなきゃいけないからね、ここは）、間投詞的な例（～さんがね、なかなかほとんど持ってなかったんで）を含む。
11	4	A-II-3d	よ	終助詞	391	81	1	473	「よ。」「よ。」という文字列で検索。倒置的な例（置いてあるんだよ、ひとつ）を含む。
12	3	A-I-20	てしまう	補助動詞4	176	175	68	419	「ちゃう」「じゃう」を含む。
13	3	A-I-18	てくる	補助動詞2	102	159	132	393	
14	3	B-8	と言う	引用	98	116	171	385	「言う」はひらがな（「いう」「ゆう」）・漢字を共に含む。
15	3	B-13	可能形（（られ）る）	可能2	129	99	136	364	「見える・聞こえる」を含まない。
16	4	B-10	とき	時間関係：同時1	108	126	118	352	「とき」はひらがな・漢字を共に含む。「Vとき」「Nのとき」「Aとき」「指示詞+とき」を含む。
17	3	B-68	ので	理由1	205	21	114	340	会話では「んで」を含む。
18	4	A-II-3a	まで	格助詞	90	132	76	298	取り立て詞の「まで」は含まない。
19	3	補足	ようだ（様態）	様態	19	69	193	281	国研（1988）の分類規準「内容を指示することを表わす。ある事物が他の事物に等しいという関係」による。「このように」「次のように」「ご承知のように」など
20	3	B-60	ようだ（比喩）	比喩・状況	3	230	42	275	国研（1988）の分類規準「ある事物が他の事物に似ているという意味」による。「まるで」をいられるかどうかで判断。
21	3	補足	ようだ（例示）	例示	43	50	176	269	国研（1988）の分類規準による。「たとえば」をいられるかどうかで判断。
22	3	B-41	たら	条件2	194	46	20	260	
23	3	B-46、47	だろう	推量・概言1、2	60	136	58	254	「推量」「確認」「疑い（だろうか）」の用法全てを含む。「だろうと思う」も含む。「どんなに～だろう」「AだろうがBだろうが」の定型表現は含まない。
24	3	B-47	と思う	推量・概言2	141	75	34	250	「（だろう）と思う」「と思われる」を含む。

通し 番号	級	分類番号	項目	文法リストの説明	会話	小説	新書	合計	備考
25	3	A-I-17	ていく	補助動詞 1	45	84	118	247	「てく」を含む。
26	4	B-15	でしょう	推量	144	22	55	221	「推量」「確認」「疑い（でしょうか）」 全ての用法を含む。
27	3	A-I-10	使役 (せる／させる)	使役	32	115	72	219	「させてくれる、させていただく」な どの「使役+授受」を含む。
28	4	B-19	もう	変化 3：事態・状態 が既に変化している	123	82	13	218	「もう+肯定／否定」「もう+数量」 の全てを含む。
29	3	B-12	こと（が）できる	可能 1	3	66	138	207	助詞「が」の入らないものも含む。
30	4	B-16	たり（文の数）	並立（動作の）	40	51	96	187	文の中に「たり」が 2 度現れるもの と 1 度しか現れないものがあるた め、検索結果は文の数で示す。「食 べたり飲んだりする」「行ったり来 たり」など様々な用法を含む。
31	3	B-73	ことになる	その他 4	21	57	109	187	例：この学校では 2 ヶ月に一度試験 をすることになっている。
32	3	B-52	ようだ（推量）	推量・概言 7	20	90	64	174	国研（1988）の分類規準「不確かな 断定」による。「ような気がする」「よ うに感じる」など。
33	3	B-56	A より B	比較 1	14	61	98	173	
34	3	B-66	ため（に）	目的（動作の）	12	61	90	163	目的の用法（例：仕事のために行く）、 利益（例：母のために花を買った） を含む。
35	4	B-8	V たい	希望 2：自分のする ことについての希望	87	57	18	162	
36	3	B-49	かもしれない	推量・概言 4	39	87	28	154	「かも」で検索したため、「かも」「か も知れない」「かもしらん」なども含 む。
37	3	A-I-19	てみる	補助動詞 3	25	89	35	149	
38	4	B-20	まだ	変化 4：事態・状態 が未変化である	64	63	22	149	「まだ+肯定／否定」「まだ+数量」 の全てを含む。
39	4	B-11	ながら	時間関係：同時 2	6	102	20	128	
40	3	補足	のではない（か）		74	16	20	110	3 級「のだ」の補足項目。「 のでは ／んじゃ ない（か）」を含む。用法 は「疑い」のみで、否定の「 のでは／ んじゃ ない」は含まない。
41	3	B-50、51	はず	推量・概言 5、6	7	60	42	109	「はずだ」「はずだった」「はずがない」 「はずがなかった」の各用法を含む。
42	3	A-I-21	ておく	補助動詞 5	66	22	15	103	「とく」を含む。
43	3	B-33	てくれる	受給 8：行為	43	54	6	103	
44	3	B-48	らしい（推量）	推量・概言 3	32	57	14	103	例：雨が降るらしい。
45	4	A-I-19	てある	動詞のテアル形	81	16	4	101	否定「てない」を含む。
46	3	B-69	ため（に）	理由 2	4	17	77	98	原因の用法（例：病気のため休む） のみ。
47	3	B-42	なら	条件 3	23	48	25	96	色々な用法を含む。
48	3	B-19	てもいい	許可 1	65	23	7	95	「て（も）いい」「て（も）よい」「N で（も）いい」「疑問詞+でもいい」 を含む。
49	3	B-3	（よ）うとする	意志 3	6	42	43	91	
50	3	B-67	そうだ	様態	12	75	4	91	
51	3	B-37	てもらう	受給 12：行為	66	21	1	88	
52	3	B-16	なければ／な きゃ ならない	義務 1	18	11	58	87	3 級 B-17 に「なくてはいけない」と いう項目があるため、ここに含める のは「なければならぬ／いけない」 「なきゃならない／いけない」。

3種類のコーパスを用いた3級4級文法項目の使用頻度調査とその考察

通し 番号	級	分類番号	項目	文法リストの説明	会話	小説	新書	合計	備考
53	4	B-13	～あと（で）	時間関係：前後2	14	44	28	86	「あと」はひらがな・漢字を共に含む。「Vあと（で）」「Nのあと（で）」「指示詞+あと（で）」を含む。時間の用法のみ。
54	3	B-79	Vようになる	その他11	5	16	57	78	
55	3	B-72	Vることがある	その他3	6	11	60	77	
56			【補足】みたいだ		51	24	0	75	3級「ようだ（様態）」の補足項目。「ようだ」は用法で分類してあるが、「みたいだ」は全ての用法を含む。
57	4	B-12	てから	時間関係：前後1	15	30	19	64	
58	4	B-14	～まえ（に）	時間関係：前後3	36	13	12	61	「まえ」はひらがな・漢字を共に含む。「Vまえ（に）」「Nのまえ（に）」「指示詞+まえ（に）」を含む。時間の用法のみ。
59	4	B-2	てください	依頼2：相手に行為を要求する	43	16	2	61	
60	3	A-I-11	使役受身	使役受身	3	33	24	60	
61			自発		0	34	25	59	
62	3	B-44	Vたまま	状態の放置	12	33	8	53	「Vたまま」を含む
63	3	B-18	のに	逆説	12	32	7	51	
64	3	B-39	ていただく	受給14：行為（敬語）	45	4	1	50	
65	3	A-I-3	受身形の敬語れる、られる	敬語2	26	7	14	47	
66	3	B-23	Vたこと（が）ある	経験の有無	16	16	15	47	否定「Vたことがない」、助詞がない「ことある」「ことない」を含む。
67	3	B-54	Vやすい	難易1	10	4	32	46	
68	3	B-17	（なくては／なくちゃ／いけない／ならない）	義務2	6	14	23	43	3級B-16に「なければ（なきゃ）ならない」という項目があるので、ここに含むのは「なくては（なくちゃ）いけない、ならない」のみ。
69	3	B-57	AほうがB	比較2	18	9	13	40	
70	3	B-1	（よ）うと思う	意志1	17	19	0	36	
71	3	B-76	かどうか	その他7	8	11	17	36	
72	3	B-11	V・A・A N+すぎる	過度（動作・状態の）	4	15	16	35	
73	3	B-78	ようにする	その他10	10	4	20	34	「努力」「目的」の用法を含む。目的の意味であれば、後件の動詞が「する」以外のものも含む。
74	3	B-14	～ほうがいい	勧告	33	0	0	33	
75	3	B-55	Vにくい	難易2	3	5	24	32	
76	3	B-4	Vことにする	意志4	8	16	3	27	
77	4	B-7	（Nが）ほしい	希望1：物についての希望	21	4	0	25	「ほしい」はひらがな・漢字を共に含む。
78	3	B-77	ように（言う）（勧告）	その他9	14	9	2	25	
79	4	B-5	uましょう	勧誘1：一緒に何かをするように勧める	4	4	15	23	
80	3	B-27	てやる	受給2：行為	3	17	1	21	
81	4	A-I-21	Vないで	動詞の否定形のテ形	3	7	9	19	「付帯状況」「～のかわりに～」「原因」の用法を全て含む。
82	4	補足	～てほしい		12	7	0	19	4級「Nがほしい」の補足項目。「ないでほしい」を含む。

通し 番号	級	分類番号	項目	文法リストの説明	会話	小説	新書	合計	備考
83	3	B-2	つもり（予定）	意志 2	0	14	2	16	予定の用法のみで、信念の用法（例：世間話のつもりで話しかけた）は含まない。
84	3	B-21	ては／ちゃいけ ない	禁止 2	9	5	1	15	
85	3	B-53	そうだ	伝聞	3	5	4	12	
86	3	B-61	なくてもいい	不必要 1	6	3	3	12	「なくて（も）いい」「なくて（も）よい」を含む。
87	3	A-II-5	らしい（典型）	接尾語 2	0	8	2	10	例：男らしい人
88	3	B-65	Vなさい	命令 2	2	7	0	9	
89	3	B-29	てあげる	受給 4：行為	4	4	0	8	
90	4	B-3	ないで（ください）	依頼 3：相手に行為をしないことを要求する	2	5	0	7	
91	3	B-35	てくださる	受給 10：行為（敬語）	3	4	0	7	
92	3	B-80、81、 82	Vところ	その他 12、13、14	2	2	2	6	「ところ」はひらがな・漢字共に含む。Vは「終止形」「Vている」「Vた」を含む。「ところ＝点」と解釈するもの（例：その意図するところは～である）は含まない。
93	3	B-15	Vたがる	希望（第三者の）	2	1	2	5	
94	3	A-I-4 B-6	お+V+ください （尊敬）	敬語 3、依頼 1	2	2	0	4	
95	3	B-7	（さ）せてください	依頼 2：自己の行為についての許可を求める	0	2	0	2	「させていただく」は含まず、文字通り「（さ）せてください」のみ。
96	4	B-1	（Nを）ください	依頼 1：物を要求する	1	0	0	1	漢字表記を含む。
97	4	A-II-6	Vませんか	（一緒に）何かするように勧める	0	1	0	1	誘いかけの用法のみ。
98	4	B-4	てくださいませんか	依頼 4：丁寧に依頼する	0	0	0	0	
99	3	B-31	てさしあげる	受給 6：行為（敬語）	0	0	0	0	